

第1章 「西暦2010年の歯科保健目標」の達成度評価

東京都では、平成12年8月に、歯科保健対策を推進するため、「西暦2010年の歯科保健目標」を設定した。この目標は、東京都歯科保健対策推進協議会において承認されたもので、都民のすべてが歯と口腔の健康を保ち、健康寿命を延伸して豊かな生活ができるよう、生涯にわたる歯と口腔の健康保持・増進の推進及び8020*の実現を目指して10年間の具体的な目標として設定されたものである。

今回、目標の最終年度を迎えるに当たり達成状況について調査した。

*8020（ハチマルニイマル）運動

おいしく食べて、健康で長生きをするために一生自分の歯を保つことを目指して「80歳になっても自分の歯を20本以上保とう」という運動。厚生労働省と日本歯科医師会の呼びかけで、平成元年から進められている。

第1節 成人期・高齢期の目標達成状況

【大目標：歯と口腔の満足度の向上】

歯や入れ歯の状態・機能にほぼ満足している者の割合を増加させる。

○歯・口や入れ歯の状態にほぼ満足している者の割合

	参考値	最終値(参考値)
20歳～39歳	44.1%	44.5%
40歳～64歳	43.4%	46.8%
65歳以上	53.2%	56.8%

【資料】東京都歯科診療所患者調査(平成21年度)

この大目標には、基準値、目標値ともに設定していないが、参考値として「歯・口や入れ歯の状態にほぼ満足している者の割合（東京都歯科診療所患者調査）」で比較する。

「20歳～39歳」、「40歳～64歳」、「65歳以上」の3群に分けてみると、最終値では、それぞれ44.5%、46.8%、56.8%と年齢の高い群で数ポイントの増加がみられた。

【中目標 1 : 歯の喪失の抑制】

60 歳における 24 歯以上自分の歯を有する者の割合を増加させる。

70 歳における 20 歯以上自分の歯を有する者の割合を増加させる。

80 歳における 20 歯以上自分の歯を有する者の割合を増加させる。

○現在歯数24歯以上の者の割合

	目標値	基準値	最終値
60歳(55歳～64歳)	65%以上	55.2%	63.4%

【資料】東京都歯科診療所患者調査(平成21年度)

○現在歯数20歯以上の者の割合

	目標値	基準値	最終値
70歳(65歳～74歳)	60%以上	53.5%	70.8%
80歳(75歳～84歳)	30%以上	27.0%	50.7%

【資料】東京都歯科診療所患者調査(平成21年度)

55 歳～64 歳では 63.4%と基準値より増加したが、目標値には達しなかった。65 歳～74 歳では 70.8%と目標値に達した。75 歳～84 歳では 50.7%と基準値より大幅に増加し、目標値を大きく超えた。

なお、8020の達成者(80歳)は39.8%であった。

歯の喪失の抑制は大きく進み、20 歯を指標とするレベルでは目標を達成しているが、8020の達成者をさらに増やすためには、歯の喪失が増加する50歳代に対する対策が重要である。

【中目標 2 : 無歯顎者の減少】

60 歳、70 歳、80 歳における歯が 1 本も無い者の割合を減少させる。

○無歯顎者の割合

	目標値	基準値	最終値
60歳(55歳～64歳)	1%以下	0.8%	0.5%
70歳(65歳～74歳)	5%以下	3.9%	0.6%
80歳(75歳～84歳)	10%以下	12.2%	3.1%

【資料】東京都歯科診療所患者調査(平成21年度)

55 歳～64 歳では 0.5%、65 歳～74 歳では 0.6%、75 歳～84 歳では 3.1%とすべての年代で目標値に達した。

【中目標 3 : 重度歯周病の予防】

40 歳、50 歳、60 歳における進行した歯周病に罹患している者の割合を減少させる。

○ CPI(地域歯周病指数)最大コード3以上の者の割合

	目標値	基準値	最終値
40歳(35歳～44歳)	20%以下	31.7%	20.1%
50歳(45歳～54歳)	30%以下	48.9%	32.4%
60歳(55歳～64歳)	40%以下	56.8%	41.6%

CPI(地域歯周病歯数)コード3:5mm以上の歯周ポケットがあり、歯周病の治療が必要な状態

【資料】基準値:東京都歯科疾患実態調査(平成11年度)

最終値:東京都歯科診療所患者調査(平成21年度)

目標設定時は歯科疾患実態調査のデータを用いたため、CPIコード3以上を有する者の割合を基準値としたが、最終値では歯科診療所患者調査のデータを用いたため、深さ5mm以上の歯周ポケットを有する者の割合を用いた。

35歳～44歳では20.1%、45歳～54歳では32.4%、55歳～64歳では41.6%と各年代ともに基準値より低下し、ほぼ目標値に達した。

CPIコード3以上の重度の歯周病に罹患した者の割合は、年齢が上がるにつれ上昇しており、併せて現在歯数も50歳を超える頃から急激に減少している。歯の喪失の抑制に重度歯周疾患の予防は不可欠であり、比較的罹患率の低い若年期からの取組を充実する必要がある。

【小目標 1 : 積極的な歯口清掃習慣の獲得】

1日1回は十分な時間(10分程度)をかけて、丁寧に歯を磨く者の割合を増加させる。

○1日1回は10分程度の時間をかけて歯を磨いている者の割合

	目標値	基準値	最終値
20歳～39歳	50%以上	20.8%	24.2%
40歳～64歳	50%以上	23.5%	25.2%
65歳以上	50%以上	35.4%	33.6%

【資料】東京都歯科診療所患者調査(平成21年度)

20歳～39歳では24.2%、40歳～64歳では25.2%、65歳以上では33.6%と各年代ともに基準値とほぼ同様の値であり、目標値には達しなかった。積極的な歯口清掃習慣は、歯周病及びう蝕の予防の基本であることから、引き続き定着を図っていく必要がある。

【小目標2：歯間部清掃用器具を用いた歯口清掃習慣の定着】

フロスや歯間ブラシを使用している者の割合を増加させる。

○フロスや歯間ブラシを週1回以上使用している者の割合

	目標値	基準値	最終値
20歳～39歳	80%以上	43.3%	53.4%
40歳～64歳	80%以上	44.6%	64.2%
65歳以上	60%以上	34.5%	58.3%

【資料】東京都歯科診療所患者調査(平成21年度)

フロスや歯間ブラシを週1回以上使用している者の割合で比較した。20歳～39歳では53.4%、40歳～64歳では64.2%と両年代ともに基準値より増加したが、目標値には達しなかった。65歳以上では58.3%とほぼ目標値に達した。どの年代もフロスや歯間ブラシを週1回以上使用している者の割合は半数を少し超えたレベルであり、更なる普及啓発が必要である。

なお、20歳～39歳、40歳～64歳、65歳以上という対象年齢の区分は、区市町村における成人歯科保健事業の年齢区分とは必ずしも合致していない。今後は、継続したモニタリングによる評価を意識し、歯周疾患検診と同じ年齢を指標の対象年齢とすることが望ましいと考えられる。

【小目標3：フッ化物配合歯磨剤の普及】

フッ化物配合歯磨剤を使用している者（20歳以上）の割合を増加させる。

○フッ化物配合歯磨剤を使用している者の割合

	目標値	基準値	最終値
20歳以上 (20歳～39歳)	90%以上	25.2%	33.3%

【資料】東京都歯科診療所患者調査(平成21年度)

最終値は33.3%と基準値よりは増加したが、目標値には達しなかった。しかし、フッ化物配合歯磨剤の市場占有率が約9割に達していることから、フッ化物配合の有無を意識せずに歯磨剤を使用している者が少なくないと推察される。

フッ化物配合歯磨剤によるう蝕予防効果は、歯磨剤の使用方法等によって大きく異なることから、フッ化物配合歯磨剤の普及状況及び効果的な使用方法について、今後とも都民に情報提供していく必要がある。

【小目標4：セルフチェック習慣の定着】

月に1回以上、歯や歯肉の自己観察をしている者（20歳以上）の割合を増加させる。

○月に1回以上、歯や歯肉の自己観察をしている者の割合

	目標値	基準値	最終値
20歳以上 (20歳～39歳)	90%以上	73.9%	71.8%

【資料】東京都歯科診療所患者調査(平成21年度)

最終値は71.8%と基準値からほとんど変化しておらず、目標値には達しなかった。セルフチェック習慣の定着は歯科疾患の予防の基本である。かかりつけ歯科医等が、個々人の口腔の状況に応じた適切な観察方法を指導することで、より定着が図られる。

【小目標5：自分自身の口腔保健に関する関心の喚起】

自分の歯の数を知っている者（20歳以上）の割合を増加させる。

○自分の歯の数を(誤差が0～1歯の範囲で)知っている者の割合

	目標値	基準値	最終値
20歳以上 (20歳～39歳)	70%以上	63.1%	56.3%

【資料】東京都歯科診療所患者調査(平成21年度)

自分の歯の数を誤差0～1歯の範囲で知っている者（20歳～39歳）の割合を指標として比較した。最終値は56.3%と基準値よりも低下し、目標値には達しなかった。

【小目標6：専門的口腔ケアを受ける習慣の定着】

定期健診や歯石除去、歯面清掃をしてくれる「かかりつけ歯科医」をもつ者の割合を増加させる。

○定期健診又は歯石除去、歯面清掃をしてくれる「かかりつけ歯科医」をもつ者の割合

	目標値	基準値	最終値
20歳～39歳	50%以上	20.0%	48.9%
40歳～64歳	60%以上	39.6%	69.9%
65歳以上	70%以上	25.4%	77.2%

【資料】東京都歯科診療所患者調査(平成21年度)

20歳～39歳では48.9%と目標値にほぼ達した。また、40歳～64歳では69.9%、65歳以上では77.2%といずれも基準値より大きく増加し、目標値に達した。かかりつけ歯科医をもつ者の割合は、特に40歳以降で大きく増加している。

生涯にわたり歯科保健を支援するかかりつけ歯科医は、今後さらに重要性を増すと考えられ、重点的な課題としていく必要がある。

【小目標7：喫煙と歯周病の関係の周知】

喫煙が歯周病のリスクであることをすべての人（20歳以上）に知ってもらう。

○喫煙が歯周病のリスクであることを知っている者の割合

	目標値	基準値	最終値
20歳以上 (20歳～39歳)	すべての人に 知ってもらう	35.1%	54.6%

【資料】東京都歯科診療所患者調査(平成21年度)

知っている者の割合は20歳～39歳を対象として比較した。最終値は54.6%と基準値より増加したが、目標値には達しなかった。

平成14年施行の健康増進法によって受動喫煙の防止策が講じられる等、禁煙支援が進みつつあり、喫煙による健康被害の一つとしての歯周病との関連性をさらに周知していく必要がある。

【まとめ：成人期・高齢期における健康づくり】

＜目標の達成状況＞

22項目中

★目標達成：7項目

☆目標達成はしていないが基準値よりも改善した項目：12項目

＜成果＞

○8020の達成者（80歳）が4割に及ぶなど、歯の喪失の抑制及び無歯顎者の減少に大きな成果が認められた。

○かかりつけ歯科医による専門的口腔ケアを受ける習慣の定着が進んでいた。

＜課題＞

○歯周病の予防

○歯の喪失の抑制

～これからの健康づくりに向けて～

○セルフケア習慣の定着及び歯周疾患予防を充実し、8020運動の更なる推進を図る。

第2節 幼児期・学齢期の目標達成状況

【大目標：生涯にわたる歯と口腔の健康の基盤づくり】

幼児期に基本的な歯科保健習慣を身に付け、学齢期にその定着を図ることは、生涯にわたる歯と口腔の健康づくりの基盤となる。このため幼児期・学齢期の大目標を「生涯にわたる歯と口腔の健康の基盤づくり」とした。この大目標には、基準値、目標値ともに設定していない。

【中目標1：乳歯のう蝕予防】

3歳、5歳におけるう歯がない者の割合を増加させる。

〇う歯のない者の割合

	目標値	基準値	最終値
3歳(乳歯にう歯がない者)	90%以上	70.3%	83.8%
5歳(乳歯にう歯がない者)	70%以上	42.5%	59.0%

【資料】3歳児歯科健康診査結果(平成21年度)
保育所及び幼稚園歯科健康診査結果(平成21年度)

乳歯にう歯がない者の割合は、3歳では83.8%、5歳では59.0%といずれも基準値より増加したが、目標値には達しなかった。

【中目標2：永久歯のう蝕予防】

6歳、9歳、12歳における永久歯にう歯がない者の割合を増加させる。
12歳における一人平均う歯数(DMF歯数)を減少させる。

〇う歯のない者の割合

	目標値	基準値	最終値
6歳(永久歯にう歯がない者)	95%以上	88.5%	96.2%
9歳(永久歯にう歯がない者)	75%以上	57.1%	77.2%
12歳(永久歯にう歯がない者)	50%以上	24.9%	56.9%

【資料】東京都の学校保健統計書(平成21年度)

〇一人平均う歯数

	目標値	基準値	最終値
12歳	1.3歯以下	2.6歯	1.3歯

【資料】東京都の学校保健統計書(平成21年度)

永久歯にう歯がない者の割合は、6歳では96.2%、9歳では77.2%、12歳では56.9%といずれの年齢も目標値に達し、12歳における一人平均う歯数(DMF歯数)も1.3歯と目標値に達した。

平成21年度の東京都学校保健統計では、7区市町村において12歳児のDMF歯数が1歯未満を示す一方、7歯以上を示す地域もあるなど、地域差が大きい。このため、都全体としては永久歯のう蝕状況の更なる改善を目標とし、併せてう蝕罹患率の高い地域に対する予防対策の充実を図る必要がある。

【中目標3：歯肉炎の予防】

12歳における歯肉に炎症所見の認められる者（GO及びGの者）の割合を減少させる。

○歯肉に炎症所見の認められる者(GO及びGの者)の割合

	目標値	基準値	最終値
12歳	10%以下	13.5%	17.6%

【資料】東京都の学校保健統計書(平成21年度)

歯肉に炎症所見の認められる者は17.6%と基準値より増加し、目標値には達しなかった。

歯周病の初期段階である歯肉炎の予防は、それに引き続く歯周病を予防することでもある。このため、丁寧な歯口清掃に加え、かかりつけ歯科医による専門的口腔ケアを受ける習慣を定着させることが望ましい。

【小目標1：フッ化物配合歯磨剤の普及】

3歳、5歳及び小学生、中学生におけるフッ化物が配合されていることを認識した上でフッ化物配合歯磨剤を使用している者の割合を増加させる。

○フッ化物配合歯磨剤を使用している者の割合

	目標値	基準値	最終値
3歳	70%以上	29.3%	55.3%
5歳	90%以上	43.2%	67.1%
9歳	90%以上	15.6%	43.9%
12歳	90%以上	17.2%	33.3%

【資料】幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査(平成21年度)

3歳では55.3%、5歳では67.1%と、ともに基準値より高い値であったが、目標値に達しなかった。

また、9歳では43.9%、12歳では33.3%と、ともに基準値より増加している

ものの、目標値には達しなかった。

しかし、フッ化物配合歯磨剤の市場占有率が約9割に達していることから、フッ化物配合の有無を意識せずに歯磨剤を使用している者が少なくないと推察される。

フッ化物配合歯磨剤によるう蝕予防効果は、歯磨剤の使用方法等によって大きく異なることから、フッ化物配合歯磨剤の普及状況及び効果的な使用方法について、今後とも啓発する必要がある。

また、フッ化物の応用法の一つであるフッ化物洗口は、う蝕予防効果が大きいことから、う蝕罹患率の高い地域やう蝕多発傾向にある者に対して普及啓発を図る必要がある。

【小目標2：フロスによる歯口清掃習慣の定着】

中学生におけるフロスを使用している者の割合を増加させる。

○週に1回以上、フロスを使用している者の割合

	目標値	基準値	最終値
12歳	40%以上	23.8%	27.1%

【資料】幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査(平成21年度)

12歳では27.1%と基準値23.8%を若干上回っているものの、目標値に達しなかった。これは、歯口清掃が歯ブラシによる刷掃だけに限定される傾向があるためと推察される。フロスによる歯口清掃習慣を定着させるには、歯科疾患の予防に加え、口臭予防や身だしなみのための使用を提示するなど、普及啓発の方法を工夫する必要がある。

【小目標3：保護者による観察習慣の定着】

幼児期及び小学校低学年で、週に1回以上、子どもの歯と口腔を観察している保護者の割合を増加させる。

○週に1回以上、子どもの歯と口腔を観察している保護者の割合

	目標値	基準値	最終値
1歳6か月	90%以上	78.1%	81.4%
3歳	90%以上	80.2%	81.3%
5歳	90%以上	69.4%	75.3%
6歳	90%以上	65.5%	67.0%

【資料】幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査(平成21年度)

1歳6か月では81.4%、3歳では81.3%、5歳では75.3%、6歳では67.0%

と、いずれの年齢も基準値を上回ったが目標値には達しなかった。保護者が子供の口腔を観察することは、歯科疾患の予防としてだけでなく、親子の触れ合いの機会という側面もあることから、今後は、子育ての楽しさを感じられるような観察方法を提案することも必要である。

【小目標4：セルフチェック習慣の獲得】

小学校高学年及び中学生で、月1回以上、歯や歯肉の自己観察をしている者の割合を増加させる。

○月に1回以上、歯や歯肉の自己観察をしている者の割合

	目標値	基準値	最終値
9歳	90%以上	68.5%	74.1%
12歳	90%以上	70.8%	66.2%

【資料】幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査(平成21年度)

9歳では74.1%と基準値を上回ったが、目標値には達しなかった。12歳では66.2%と目標値に達しなかった。

いずれの年齢でも自己観察している者の割合は7割程度であり増加していないため、単独の指標とせず、行為としての「丁寧な歯磨きなど」の推奨と合わせていくことが望ましいと考えられる。

【小目標5：専門的口腔ケアを受ける習慣の定着】

定期健診や予防処置（フッ化物歯面塗布、シーラント処置等）をしてくれる「かかりつけ歯科医」をもつ者の割合を増加させる。

○かかりつけ歯科医をもつ者の割合

	目標値	基準値	最終値
3歳	60%以上	31.3%	45.0%
5歳	90%以上	65.9%	75.6%
9歳	90%以上	73.9%	80.1%
12歳	90%以上	53.6%	59.7%

【資料】幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査(平成21年度)

かかりつけ歯科医を持つ者の割合は、3歳45.0%、5歳75.6%、9歳80.1%、12歳59.7%と、いずれの年齢も目標値には達しなかったが、基準値よりも改善していた。幼児期・学齢期におけるう蝕及び歯肉炎予防は健康づくりの課題であるため、引き続きかかりつけ歯科医の定着を図る必要があると思われる。

【小目標6：甘味食品・甘味飲料の過剰摂取の制限】

甘味食品や甘味飲料を毎日飲食する習慣をもつ者の割合を減少させる。

○甘味食品をほぼ毎日食べる者の割合

	目標値	基準値	最終値
3歳	—	42.0%	27.1%
5歳	—	35.2%	37.1%
9歳	—	23.9%	22.4%

【資料】幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査(平成21年度)

○甘味飲料をほぼ毎日飲む者の割合

	目標値	基準値	最終値
3歳	—	36.7%	27.8%
5歳	—	27.9%	22.7%
9歳	—	22.8%	21.5%

【資料】幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査(平成21年度)

甘味食品をほぼ毎日摂取している者の割合は、3歳では27.1%と基準値よりも大きく減少し、良好な状況へ向かっているが、5歳では37.1%と基準値より若干上回った。9歳では22.4%と基準値と比べてほとんど変化は見られなかった。

甘味飲料をほぼ毎日摂取している者の割合は、3歳では27.8%、5歳では22.7%と基準値を下回り、良好な状況へ向かっている。9歳児では21.5%と基準値を若干下回ったものの、この10年間にほとんど変化は見られなかった。

【まとめ：幼児期・学齢期における健康づくり】

＜目標の達成状況＞

28項目中

★目標達成：4項目

☆目標達成はしていないが基準値よりも改善した項目：21項目

＜成果＞

- う蝕罹患状況は改善傾向にあり、特に永久歯のう蝕罹患状況が大きく改善した。
- かかりつけ歯科医による専門的口腔ケアを受ける習慣の定着が進んでいた。

＜課題＞

- う蝕罹患状況の地域差
- 学齢期の歯肉炎予防

～これからの健康づくりに向けて～

- う蝕罹患状況の地域差にも着目し、引き続きう蝕予防対策を充実する。
- 歯肉炎予防の推進のため、丁寧な歯磨きやフロスの使用等セルフケア習慣の定着を図る。